

# 松山天狗

前

ワキ  
西行

シテ  
老翁

後

シテ  
崇徳院

ツレ  
相模坊

地は  
讃岐

季は  
春

「風の行方をしるべにて。く。松山にいざや急が  
ん。

「是は嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。さても  
新院本院位を争ひ。新院うち負け給ひ。讃岐の国  
へ流され。松山と申す処にてほどなく崩御ならせ  
給ひたるよし承り及び候ふほどに。御跡弔ひ申さ  
ん為めに。唯今讃岐の国へと急ぎ候ふ。

「思ひ立つ。心も西に行く月の。く。幾夜な夜な

の仮枕。その数いさや白雲の。斯かる旅寐を過し  
来て。讃岐の国に着きにけり。く。

「急ぎ候ふほどに。讃岐の国に着きて候。人を相待  
ち新院の御廟処松山を尋ねばやと思ひ候。

「道芝の。露踏み分くる通路の。山風さそふ心かな。

「いかに是なる尉殿。御身は此あたりの人にてまし  
ますか。

「さん候是は此あたりの者にて候。御僧は何くより

何方へ御通り候ふぞ。

ワキ「是は都嵯峨の奥に住居する西行と申す者にて候ふが。新院この讃岐の国へ流され給ひ。ほどなく崩御ならせ給ひたる由承りて候ふほどに。御跡を弔ひ申さん為め是まで参りて候。松山の御廟所を教へて賜はり候へ。」

シテ「さては天下に隠れなき西行上人にてましますかや。先づあれに見えたる大山は白峯と申す高山な

り。少しあなたに見え候ふこそ。新院の御廟所松山にて候へ。御道しるべ申さんと。御僧をいざなひ奉り。

地「行方も知らぬ旅人に。く。はや馴れそめて色々の。情ある言の葉の。心の内ぞありがたき。まだ踏みも見ぬ山道の。岩根を伝ひ谷の戸の。苔の下道たどり来て。風の音さへ冷ましき。松山に早く着きにけり。く。」

シテ詞

「是こそ新院の御廟処松山にて候へ。なんぼうあさましき御有様にて候ふぞ。

ワキ詞

「さては是なるが新院の御廟にてましますかや。昔は玉楼金殿の御住居。百官卿相にいつかれ給ひし御身の。かゝる田舎の苔の下。人も通はぬ御廟処のうち。涙も更にとゞまらず。あら御痛はしや候。かくあさましき御有様。涙ながらにかくばかり。よしや君昔の玉の床とても。かゝらん後は何にか

はせん。

シテ

「あら面白の御詠歌や。賤しき身にも思ひやりて。西行を感じ奉れば。

ワキ

「実にや処も天ざかる。

地

「鄙人なれどかくばかり。く。心しらるゝ老の波の。立ち舞ふ姿まで。さもみやびたる気色かな。春を得て咲く花を。見る人もなき谷の戸に。鳴く鶯の声までも。処からあはれを。催す春の夕べか

な。

ワキ詞

「如何に尉殿。君御存命の折々は。いかなる者か参り御心を慰め申して候ふぞ。

シテ詞

「君御存命の折々は。都の事を思し召し出だし。御逆鱗の余りなれば。魔縁みな近づき奉り。あの白峯の相模坊にしたがふ天狗ども。参るより外は余の参内はなく候。かやう申す老人も。常々参り木陰を清め。御心を慰め申しゝなり。さても西行唯

今の詠歌の言葉。肝に銘じて面白さに。老の袂をしぼるなり。

地

「暇申してさらばとて。又立ち帰る老の波。翁さびしき木の本に。立ち寄ると見えしが。影の如くに失せにけり。(中人)

後シテ

「五蘊もとより皆是空。何によつて平生の身を愛せん。軀を守る幽魂夜月に飛ぶ。いかに西行。是まではるぐ下る心ざしこそ。返すぐも嬉しけれ。

又唯今の詠歌の言葉。肝に銘じて面白さに。いで  
く姿を顕はさんと。

地「いひもあへねば。御廟しきりに鳴動して。玉体あ  
らはれおはします。誠に妙なる玉体の。く。花  
の顔ばせたをやかに。こゝも雲井の都の空の。夜  
遊の舞樂は面白や。(舞)

地「かくて舞樂も時過ぎて。く。御遊の袂を返し給  
ひ。舞ひ遊び給へば又古への。都の憂き事を思し

召し出だし。逆鱗の御姿。あたりを払つて恐ろし  
や。

地「あれく見よや白峯の。く。山風あらく吹き落  
ちて。神鳴り稲妻しきりに満ちく。雨遠近の雲  
間より。天狗の姿は顕はれたり。

ツレ「そもく是は。白峯に住んで年を経る。相模坊と  
は我事なり。さても新院思はずも。此松山に崩御  
なる。常々参内申しつゝ。御心を慰め申さんと。

小天狗を引き連れて。

地「翅を並べ数々に。く。此松山に随ひ奉り。逆臣の輩を悉く。取りひしぎ蹴殺し。会稽をすゝがせ申すべし。叡慮を慰めおはしませ。

シテ「其時君も悦びおはしまし。

地「其時君も悦びおはしまし。御感の御言葉数々なれば。天狗もおのく。頭を地につけ拝し奉り。是までなりとて小天狗を。引きつれ虚空にあがると

ぞ見えしが。明け行く空も白峯の。明け行く空も白峯の梢に。又飛びかけつて失せにけり。